少年音樂家（八）

東京女高師教授　岡田美津

八、「せよ」と「するな」

月曜日から民雄には新しい生活が始まつた—爲べき事と爲て不可い事とで一杯な妙な生活であつた。民雄は自分の面白いと思ふ事が皆不可い事で、不快だと思ふ事が皆爲べき事なのが時には不思議でならなかつた。玉蜀黍畠を鋤いたり、草を拔いたり、薪箱を一杯にしたりするのは皆爲べき事で林檎の樹の下に寢そべつたり、野の近くを流れる小川の奥を探つたり、土の中の蟲けらを眺めたりする—かういふ方は皆不可い事なのだつた。

新右衞門の方でもその月曜の朝思ひ掛けぬ經驗をした。その一つは、折角美しく生えてゐる草を拔いてしまつて枯らすのは惜しいといふ暢氣な民雄の考をうまく言ひ負かすのに骨が折れた事だつた。今一つは、雲が動いたり、花盛りの樹があつたり、梢で鳥が鳴いたりさういふ氣を散らすものを眼の前において子供に仕事をさせるのは之また骨が折れるものだといふ事だつた。

それでも民雄が爲べき事はし、不可ない事は爲まいと一生懸命努めたので四時になつた時新右衞門が—（嚴しいが無法ではない）—彼に暇をやつた。民雄は大よろこびで運動にいつた。雨氣だつたのでバイオリンは持たずに行つたが彼の顏、彼の步調、彼の腕の搖れ方までが昨日の朝のあの歡喜の歌を彼に謠つてくれてゐるのであつた。今日は仕事だといつていろンな事をさせられたけれども民雄の家戀しい、淋しい心には、世の中があの嬉しい「おまへ、居ておくれ、ゐておくれ」の曲をまだ謠ひつゞけてゐてくれるやうに思はれた。

その内に民雄は烏を見付けた。

彼は烏の事を知つてゐた。山の家に、二三羽位友達にしてゐたのが居たので彼はその鳴き聲を聞きわけて返事をしてやる事を覺えた。その智慧に感心し

たり、その氣分を尊重してやる事も覺えた。彼は烏のする事を見てゐるのが好きだつた。翼を擴げて活き〳〵といかにも自由に空を切つてゆくその樣が殊に氣に入つてゐたのであつた。

ところがこの烏は！

翼をグッと擴げて風を切つてゆくのではなく畑の眞中を登つたり降つたり妙な格好をして羽をバタバタさせてゐるのであつた。傍へ驅けていつて見て民雄は、ぢきにその理由が解つた。烏は、長い革紐で、杭に緊と縛りつけられてゐた。

民雄は氣の毒さにどぎまぎして

「あら、あら！　さ、一寸俟つて御出で、今よくしてやるから！」

と彼は自分の力を信じきつて手早くナイフを取出して紐を切らうとした。併し「よくしてやるからと言ふ」のと「よくしてやる」のとは大分違ふものだと悟つた。

烏は民雄を自分の味方だとは思はなかつた。此子も、自分をこんな目に逢はせたあの、石を投げたり鐵砲を打つたりする人間といふ奴の片割れだと認めたらしく、嘴だの、爪だの翼だのでこの生意氣にもいぢめに來たらしい憎い敵に反抗た。民雄はやつと思ひついて上半衣を脱いで、怒りきつてゐる烏の上から押被せてやつと近よつて目的を達したのであつた。そんなにしてさへ、烏の脚には紐革がいくらか殘つてしまつた。

やがて、烏は羽音をさせて一聲怖れの音を放つたが忽ちそれを勇ましい勝利の聲に換へて空へ舞ひ上り、遠い梢を目掛けて飛び去つた。少年は悦ばしさうに自分の事業の結果を眺めやつてゐたが、衣服をまた引かけて歩き出した。

民雄が歸つて來たのは六時近かつた。納屋の入口のところで彼は平藏に遇つた。

「ヤア、草取りは濟ましたンかね」と平藏が元氣よく尋ねた。

「え！」と民雄は氣のない返事をして「してしまつたけれど、僕嫌だつたンです」。

「暑い仕事だからな」

「そんな事はかまはないンです」と民雄は答へて

「僕の嫌だつていふのは、綺麗な植木を引き拔いて枯らしてしまふ事なの」

「草――綺麗な植木、どうだい呆れらあ」

と平藏は絶叫した。
民雄は平藏の聲に嘲弄の調子があるのを聞き分けて、
「だつて、綺麗なんですもの。此上なしに綺麗で此上なしに大きいのがいつでもあるンです。新右衞門さんが教へてくれてね、僕それを拔かなければならなかッたンで」
「どうだい、呆れるなあ」と平藏は口の內でいつてゐた。
「でも、僕運動にいつて來たから氣分がちッとよくなつたんです」
「そうかい」
「え、よい運動しましたよ。あすこの山の森の中まですつと入つていつたの。僕始終歌を謠つてゐたンです—御腹の中でゞすよ。こゝの御內儀さんが—あの—僕に居てくれッていふから僕嬉しくつてね御腹ン中で謠つてゐるッてどんなだか解るでせう」
平藏は頭を搔いた。
「どうもよく解らねいンだよ。歌ふ方は得手ぢやねいからな」
「聲を出して謠ふのと違ふ。御腹ン中での事、嬉しい事があると、そらさうでせう」
「嬉しい……事が？」平藏は立停つて口を開けたまま眼を目張つた。それから急に顏付をかへて解つたらしくにやゝ〳〵して。
「あゝ御めへにや、かなはねい。さうよ、御腹ン中が歌ふやうだな、何か素的に嬉しい事でもあるとおれ今まで思ひつかずに居たぞ」
「解つたでせう、僕の歌、バイオリンで彈く歌ね、あれは御腹の中で考へつくの。それから僕鳥にも歌を謠はせましたよ、唯鳥は聲を立てゝ謠つたンです」
「鳥がうたふ！下らねい！鳥が歌をうたふなんておらを欺さうたつてさうはいかねいよ」「鳥だッて嬉しい時は謠ひます」と民雄は頑張つた、「どうしたつて怒つたり焦たりしてゐる時の聲と違ふもの先刻の鳥の聲を小父さんにきかせたかつたな。歌つたンですよ。逃げられるやうになつたのが嬉しかつたンですね。僕が紐を解いてやつたンです」
「森ン中で鳥を捕つたつていふだな」と男は疑つてゐるらしかつた。

「いえ、僕が捕つたのぢやない。誰かゞつかまへて結ひ付けて置いたの。烏は困つてゐましたよ、」
「森ン中に括つてあつたッて、烏が！」
「いえ、森の中に居やしない。山へ登らないうちなんです」
「烏が括つてあつた！おい、御めへ、何を言つてるンだ、烏が何處に居たンだつて」
平藏の態度が急に緊張し出した。
「向ふの畠に、誰かがね・・・」
「玉蜀黍畠か！やれまあ！あの、あの烏に手を付けたンぢやあるめいな！」
「僕になか〳〵手を觸けさせなかつたンです」と民雄は言譯をして「烏ッてば怖がつてね。しやうがないから僕、頭から僕の著物を被せてやつと紐を切つてやッたンです」
「紐を切つてやつた！」といつて平藏は彈かれたやうに立ち上つて「御めへ――あの烏を逃がしたのか！」
民雄は思はず後へ下つた。
「えゝ、さうなの、逃げたがつてゐたから、烏は・・」
平藏はがッくりと腰を下ろしてしまつた。

「とんでもねい事をしてくれたな。親方は何といふか知らねいが、おら御めへに一言いひてい事がある。いゝか。おらはな、あの烏を捕るッて、暇が隙がなねらつてよ、まる一週間かゝつたンだ。それもな、うまく、とらめいやうと思つて、夜中ッから、翌くる日の晝前中叢ン中にひそまつてたからこそ捕めいられたのだ。そンだけぢやまだ用はすまねいンで、あいつを括りつけるのが容易な事ぢや無かつたンだ。いまだにこゝにあいつの嘴のあとが殘つてら。それを御めへが放しちまつたんだ――こんな風にチョキンと」と彼は腹立たしさうに指を彈いて見せた。
民雄はちつとも後悔の樣子を見せないで、なんて殘酷なのだらう、うそのやうだといふ顏をして。
「あなたが態と括りつけたのですッて」
「さうよ」
「烏はいやがつてましたよ。いやがつたのが解らなかつたンですか」
「嫌がる！嫌がつたらどうするンだ。おらだつて自分の玉蜀黍が食はれてしまふのは嫌だ。御めへなそんな顏しておらを見なくッたッていゝやい。お

ら彼畜生にそんな、ひどい事しやしねい――飛べるようにしておいてやつたぢやねいか。空腹くもありやしねい。食物だつて、水だつてちやんと傍へ置いてやつたンだ。あいつが羽をバタバタやつたり、グン〳〵引張つたり逃げやうとさへしなければや何も困る事はありやしねい。あいつが、もがいたッておらの知つた事ぢやねい」

「でも、あなただつて蹠くでせう、もし二つ大きな翼があつてその翼で向ふのあの大きな樹の上まで飛んでゆけて、それからもつと〳〵上の空までもゆけて御星さんと話が出來るやうだつたら？あなたより百倍も大きな人がやつて來て、そこの柱へあなたの脚を結び付けてしまつたらあなただつて引張つたり蹠いたりするでせう？」

平藏は怒つて眞赤になつた。

「こら御前に御說法してくれッていつたンぢやねいぞ。おらの爲た事はこゝいらの人が皆やつてゐるンだ――鳥をつかめへる程の腕の人ならば、鳥の盜賊めを追拂ふ道具としちやァ、生きた鳥と等に著物著せたのとぢや比べものにやならねい。おらがあの鳥つかまへたッてンで、こゝらの百姓らはそれや羨ましがつてら。それを、御めへがやつて來て、ナイフでチョンとやつてすかり駄目にしちまつたンだ、おら――心から腹が立つてならねい！といふ事よ」

「ぢやあなたが他の鳥を嚇すためにあの鳥を自分で括りつけたンですね」

「さうとも。あれに限るンだ」

「ま、ほんとに氣の毒ですね！」

「氣の毒がるのがあたりまへよ。そ言つたつておらの鳥が以前通りになるわけぢやねいが」

民雄は晴やかに。

「さうですね。そこが嬉しいンです。僕は鳥の事を考へてゐるンですよ。氣の毒ですもの。あんな風に括りつけられたら私達だつて厭ですから……」

平藏は民雄をじつと視て鼻息荒く起ち上つて、さつさと家の方へ歩いていつてしまつた。

その晩民雄は一同に卒氣なく扱はれた。新右衞門の家に置いて貰へなくなる程の騷がもち上らないですんだのは御內儀さんの氣轉と根氣と歎願との御かげであつた。やつと追出されないですんだものゝ民雄だつても自分が、かう早くみんなを失望させてし

まつたのを承知して情なく思つた。その晩のバイオリンはこの子の平常を知つてゐる人には不思議とおもはれる程悲哀の調子をふくんでゐた。

翌日民雄は爲べき事を皆忠實にしやうとした。仕事はどれも上手に出來たといふわけでもなかつたが彼の努力してゐた事はよく分つてゐたので、怒りきつてゐた平藏も、すこし心が解けたらしかつた。新右衞門は四時に再び民雄に暇をくれた。

しかし民雄には氣の揉める事がまた出て來た。今日は捕はれてゐる烏ではないが、それに似た可愛想な不思議千萬な事件であつた。

森の外れで、彼は二人男兒が鐵砲を肩にして死んだ栗鼠と兎をもつてゐるのに出遇つた。前日から催してゐた雨が降りもしなかつたので、この日民雄はバイオリンを携へてゐた。森へ入つたところでバイオリンを彈いてゐるとそこへ二人男兒がやつて來たのである。

「アッ！」

と思はず聲を立てゝ民雄は彈き止めてしまつた。

男兒等の方でも民雄とバイオリンを觀て、同樣に吃驚りして立停まつてぢつと視てゐた。

「バイオリンを持つてるあの宿無し子だぜ」と一人が相手にカス〳〵聲で囁いた。

民雄は、男兒の持つてゐる死んだ獸を哀れむやうに見て、慄えてゐた。

「それも——死んでゐるンですか」と彼は尋ねた。

大きい方の男兒が少し得意氣に頷(うなづ)いて、

「そうさ、鐵砲で打つたンだ——栗鼠の方は。兎はこの金ちやんが係蹄(わな)で捕まへたンだよ」

と言ひかけて、民雄が感心して崇めるやうな顏をするのを態々待つてゐた。

併し民雄の眼は感心して崇めるどころでなく恐れ呆れてうそかと思つてゐるらしかつた。

「君達が遠い國へ遣つてしまつたンでンですか」

「俺達が——如何したつて」

「遣(や)つてしまたのかッていふンです。遠い國へ、行かせてしまつたの？」

年下の方の少年はまだ眼を圓くしてゐたが、大きい方は小惡(にく)らしくにや〳〵して。

「さうさ」 手短かに平然と「さうだ、遠い國へ遣つたンだよ」

「でも、この獸(けもの)達が行きたがつてゐたつていふのが

如何して分つたんです」
「行きたかつた？ヱ？」
と年上の少年は思はず口を出したが、またもつと悪悪しく齒を出して。
「あのね、實はね、僕等それは訊いてみなかつたのさ」
と嘲弄した。
民雄は心から情なささうな顔をして。
「そんなら君達は、ちつとも知らないンだ。あれ達は行きたくなかつたのかも知れない。もし行きたくなかつたのなら僕の父さんみたやうに歌ひながらなんて、とても行けやしない。父さんは遣られやしやなかつた。御自分で行きなすたンだ。そして謠ひながら去つて御しまいなすたのだ。でもこの獣は——君達だつて今誰かゞ來て、君達が行きたいかどうかも知らないのに、遠い國へ君達を遣つたらどうですか」
二人とも返事をしなかつた。不氣味な、奇體なものを見た時のやうに、眼に恐怖を示して二人ながら横へ〳〵と外づれていつて、しまひに一目散に岡を下へと走り去つた——時々怖さうに後を見返り〳〵獨り殘されて民雄は困つた、惱ましげな顔をして歩いていつた。

日本幼稚園協會役員

會長　湯原元一
主幹　倉橋惣三
評議員（イロハ順）
乙竹岩造。吉田熊次。田子一民。田中ふさ。乘杉嘉壽。野口援太郎。野口幽香。安井哲。槇山榮次。藤井利譽。下田次郎。日田權一。弘田長。菅原敎造。
幹事（イロハ順）
井村くに。池田トヨ。坂内ミツ。星野樂。和田實。和田くら。梶原梢。土川五郎。奈良山梅。向井琴柱。黒瀨艷。小向きみ。小山はな。及川ふみ。